

半世紀前からの

「今、蘇る『文集』」

贈り物



蒲郡市民間大使

内田雅敏・プロフィール

蒲郡町生まれ

東京弁護士会所属

著書「乗っ取り弁護士」

「これが犯罪? ビラ配りで逮捕を考える」など多数

前号までのあらすじ

思いもかけず内田氏に届いた小学2年のときの文集。

文集を開くと、同級生たちの懐かしい文章が目飛び込んできました。いろいろなテーマごとに書かれている文集を読み進むうち、当時の同級生の顔が、一人ひとり浮かんでくると同時に、走馬灯のように出来事が思い出されます。



当時我が家は、夏はアイスクャンデー屋、冬は焼き芋屋で生計を立てていた。夏、アイスクャンデー製造機の横に木の水槽が置かれ、常に水が流れていた。外か

ら帰ると、そこで必ず手を洗った。食物商売であるために、衛生にはことのほか気を使い、父母たちが「そんなことをすると保健所に叱られる」ということをよく言うので、ある時、私が「天皇陛下と保健所とどちらが偉いか」と尋ねたという。父母から聞いた話だ。夏休みは大抵、家の手伝いで、あまり遊ぶ時間はなかったが、それでも学校に行かなくてもすむ――学校に行くこと自体は友達と遊んだりできるから嫌いではなかったが、勉強は嫌いだった――と思うとうれしかった。夏休みに入る学期末の日、先生が通知表を渡した後、クラスの生徒たちに夏休み中は不規則な生活をしないように、また、アイスクャンデーなど食べてお腹をこわさないようにと注意することがあった。そんなときが一番嫌いだった。クラスの皆が私の方を振り向いてニヤリと笑うのだ。今日でこそアイスクャンデーやアイスクリーム

はお菓子として市民権を得ているが当時は違った。笑った中には私の家に遊びに来て、アイスクャンデーをもらった連中もいたのだが、子供とは残酷なものだ。後年、いろいろないきさつを経て、弁護士を業とするようになり、通常事件の他に反権力的な事件も手がけるようになったが、その遠因はこの幼少期の体験と学芸会でやった2つの劇にあると本気で思っている。学芸会でやった2つの劇とは「桃太郎」と「カチカチ山の里」である。前者は小学校2年生のときのことで、私は鬼の大将役であった。後者は6年生のときのことで狸をやった。いずれも悪役であり、いささか不本意だった。もっとも鬼の大将は自分がたくさんいてまんざらでもなかったが、女の子の真っ赤なセーターを着せられ、町の有力者である織物屋の息子が演じた桃太郎の前で土下座させられ、恭順の意を表する踊りをさせられたのには閉口した。この桃太郎は後に東大教授になった。市の現教育長をやっている幼

にわとり
ぼくがお祭りであったひよこが大きくなってたまごを生んでくれましたが、このごろ産まなくなりました。
もうとしよりになってしまったのかなあ。
(N・H男児)

彼は校長の息子で父親の蒲南へ赴任に伴って2年生の秋転校して来た。道路を挟んで学校の東隣に校長先生用の官舎があった。町が用意したものでちょっとした庭つきの立派な家だ。校長先生というのはとてつもなく偉いものだと思った。N・Hとは小学校のときは全く付き合いがなかったが、中学・高校では親しく付き合い合った。私とは異なり屈折が全くなく、明朗、快調、勉強はもとよりスポーツも万能で、同級生から信頼も厚く、女生徒の憧れの的でもあった。

幼馴染のよさは社会人になつてからのややこしいことは抜きにして、ただひたすら懐かしさに涙することができることである。
(つづく)